

Clostridium difficile toxin と慢性炎症性疾患の症状再燃との関連

Association of Clostridium difficile Toxin with Symptomatic Relapse of Chronic Inflammatory Bowel Disease: Y. M. Trnka, J. T. LaMont (Gastroenterology 80: 693 ~ 696, 1981)

抗生物質による偽膜性大腸炎の95%, 抗生物質性下痢の20%の便で, Clostridium difficile toxin が陽性である。この toxin は, 抗生物質による下痢に特異的と考えられていたが, Larson らは, 潰瘍性大腸炎の患者の便中に toxin を認め, Clostridium difficile の繁殖に抗生物質が必須でないことを示唆した。

著者らも最近, 活動性の慢性非特異性腸炎患者の便中に C. difficile toxin の存在を報告し, その患者が症状再燃を来し, vancomycin 治療に奏効したのを経験した。

対象は, 潰瘍性大腸炎 35 例, クロウン病 24 例の計 59 例で, toxin

の陽性率は, 疾患の活動性に関連があった。軽症では toxin は認められず, 中等症では 19 例中 2 例, 重症では 15 例中 9 例に陽性だった。潰瘍性大腸炎では 11.4%, クロウン病では 29.1% に陽性だった。11 人中 4 人は, sulfasalazine や他の抗生物質の投与既往はなかった。Vancomycin は, 8 人中 5 人で明らかに奏効し, 治療法のいかにかわらず, 症状の改善で toxin は消失した。

C. difficile に感染した炎症性腸疾患患者で自然治癒が認められているが, 疾患の再燃に果たす役割も確かなようだ。Toxin 陽性の全患者に vancomycin 治療が必要かどうかはわからない。抗生物質を投与されていない患者での C. difficile の繁殖の理由は明確でないが, 腸疾患そのもの, または治療薬が腸内の細菌叢を変え, C. difficile の繁殖を促進し, その toxin が病的粘膜に更に傷害すると思われる。Sulfasalazine の分解産物の sulfapyridine は, 腸内細菌叢に影響を及ぼすことが知られている。それゆえに C. difficile の

繁殖を促すかもしれない。以上の結果から, Campylobacter, Shigella らと同様に C. difficile の感染は, 炎症性腸疾患の増悪をひき起こす要因となる。これらの疾患の治療に当たり, C. difficile toxin を認めたら, vancomycin はじめ, これに対する方策をとることが, 潰瘍性大腸炎およびクロウン病の治療に大いに貢献するであろう。

【コメント】 Clostridium difficile は偽膜性腸炎との関連でにわかに脚光を浴びてきた。これと炎症性腸疾患との関連についての仕事は新しい。Sulfasalazine の分解産物 sulfapyridine は, 炎症性腸疾患に効果があるものと考えられてきたが, C. difficile の増殖を促すとしたら, 病状を悪くすることになるが, 今のところ, そのような事実をにおわすような経験はない。今後この点について注意して観察してみたい。

(愛知県がんセンター第1内科

小林世美 抄)